

内部映像を独占スクープ！

# 植松死刑囚がやまゆり園で見えていた光景

渡辺一史「ライフイクション」



2016年の事件直後の津久井やまゆり園正門前の献花台。あれから5年経った

2016年、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」(写真①)で19人を殺害した植松聖死刑囚は、なにゆえに重度障害者は生きる意味がないと思うようになったのか。関係者が提供してくれた貴重な内部映像をもとに考えてみたい。

【写真②】は、かつて津久井やまゆり園に入所していた吉田竜成さんという利用者が、2018年に原因不明の骨折をした際の写真。園側から納得のいく説明はなく、母・美香さんは虐待を疑ったが今もうやむやのままだ。

【写真③】は、同じく元利用者・平野和己さんの津久井やまゆり園時代の殺風景な居室である。和己さんの支援記録を見ると、マット1枚のこの部屋に一日

平野和己さんの津久井やまゆり園の居室



愛名やまゆり園でY字ベルトで固定され、両手にミトンをはめられたAさん

中閉じ込められていた疑惑も生じる。

P11〜12の【写真④〜⑩】は「愛名やまゆり園」という施設の内部映像である。津久井と同じく神奈川県立施設で、いずれも民間の社会福祉法人「かながわ共同会」が県の指定管理者として運営している。知的障害の中でも、特に対応が難しい「強度行動障害」の利用者が多いことでも共通点がある。いわば、きょうだい施設といつていい。

ここの施設の職員が、事件解明につながればという意図で内部を隠し録りし、提供してくれた動画のスクリーンショットである。

津久井と愛名——同じ法人が運営する両やまゆり園は、これまで利用者への虐待がたびたび報じられ、県の調査を受けてきた。

《24時間の居室施設を行うなど「虐待」の疑いが極めて強い行為が、長期間にわたって行われていた事例が確認された》

県が、今年3月に出した報告書(障害者支援施設における利用者目線の支援推進検討部会報告書)にもそう明記されているが、いったいどれだけの人が、この現実を我がこととして実感できるのだろうか。

例えば、上の【写真④】。ここでは仮にAさんと呼ぶが、車いすにY字ベルトで固定され、両手に分厚いミトンをはめられている。Aさ

津久井やまゆり園での吉田竜成さんの骨折写真



んについて施設職員の一人はこう証言する。「見てわかるように、Aさんのまわりには誰もいませんよね。Aさんは拘束するのが当たり前という雰囲気、拘束しない時間を少しでもつくりたいという議論さえされません」

これは昨年9月の映像なので、すでに県の立入調査が行われた後だが、Aさんはずっと身体拘束されたままだったことになる。

「Aさんは、自傷行為が激しい利用者さんで、自分の指を噛んじゃうんですね。ミトンをはずせばわかるのですが、爪がボロボロでマニキュアを塗って保護しています。それから、尿道カテーテルを入れている方なのですが、それを自分で抜いちゃったりするんで、二重の意味でミトンをしているんです」

そもそも強度行動障害とは、激しい自傷行為や他害行為、異食行為、パニックなどが頻繁に起こる状態をいう。本来であれば、なぜAさんが自傷行為を起こすのか、その原因を探った上で、適切な支援をするべきなのだが、県の報告書には、かながわ共同会の支援の実態についてこう記されている。

《行動障がいのある人の支援について、なぜこのような行動が起きるかをアセスメントし、計画を作成してモニタリングしながら支援していくという科学的な「エビデンス」に基づく



ピースサインをする平野和己さん(上)と吉田壺成さん(右下)



⑤～⑩愛名やまゆり園の居室に閉じ込められるBさん

実践 (Evidence-based practice :「EBP」)を行っていると「このことが確認できなかった」【写真⑤～⑩】は、愛名やまゆり園の居室に閉じ込められるBさんだ。園側は、Bさんが自力で重たい鉄扉(⑤⑥)を開けられると主張するが、どう考えても無理がある。【写真⑦】は扉のガラス窓からずっと外を眺めるBさんの姿であり、【写真⑨】は外に出たい一心で、扉のフチをなめまわして錆びついてしまった写真というから、胸が苦しくなる。Bさんについては、職員からの内部告発を受け、毎日新聞デジタルが写真つきで「居室への閉じ込め」を報じたが、かながわ共同会側は県のヒヤリングに対して、こう答えたことが先の報告書に書かれている。

《本人は自ら扉を開けて出てくる事ができるので、居室施設であるとの認識はない》《夜中に扉を叩くことがあるが、外に出たいとの訴えではなく、感覚刺激、叩いた時の音や振動を楽しんでいると認識している》結局Bさんはその後も虐待認定されぬままだ。今も冷たい鉄扉の向こうの何も無い居室に閉じ込められたままなのだろうか。薄いマットが敷かれただけの居室(⑩)も実に殺伐としている。

一方、P13【写真⑫～⑮】は、津久井やまゆり園を退園し、横浜市内の別の施設で暮らすようになった平野和己さんと吉田壺成さんを私が撮影したものだ。

津久井やまゆり園時代には、激しい行動障

害が見られた2人だが、今では法人内のリサイクルセンターなどでフルタイムで生き生きと働いている。平野和己さんの父・泰史さんは、その大きな変化にこう驚く。「最初はうちの子にそんな作業ができるんだろうかと疑ったんですが、仕事を任されている、必要とされているという充足感なのか。話す内容も全然変わってきたし、何より社会性が身についてきたのが一番大きいですね」支援しただけで障害は重くもなるし、軽くもなる。そのことが強度行動障害ほど如実に見てとれる例はない。この大きな違いは、いったい何によるものなのだろうか。

吉田壺成さんの母・美香さんも、「お箸の練習をするようになったのは今の施設に移ってからです。母親ながらお恥ずかしい話なのですが、ここまで上手にお箸を使えるようになるとは思ってもみませんでした(写真⑬)」「【写真⑭】は、知的障害者の支援に定評のある社会福祉法人で撮影した居室。行動障害のある人の適性に合わせ、さまざまな工夫が施されているのを見てとれる。【写真⑬⑭】と比較すると、その違いは一目瞭然だ。

なお、これらの写真については、P92の鼎談記事「内部告発が明らかにしたやまゆり園での「虐待」」でさらに詳しく論じている。

# 内部告発が明らかにした やまゆり園での「虐待」

T「かながわ  
共同会元職員」  
渡辺一史  
「ライオン」

相模原障害者殺傷事件の背景には、植松聖死刑囚が勤務した障害者施設での不適切な支援の実態があった。そして今年9月、もう一つの「やまゆり園」での虐待が再び内部告発で明らかになった。

●はじめに……………渡辺一史

それは異様な支援の光景だった。知的障害のある利用者たちを居室に閉じ込め、外から職員がカメラとモニターで監視する支援が常態化していたというのだ。9月末、共同通信社が複数の職員からの情報提供をもとに「虐待」疑惑を報じた。施設の名は「中井やまゆり園」という。

一方、2016年に植松死刑囚が衝撃的な殺傷事件を起こしたのは「津久井やまゆり園」である。同じ名称のため業界

内にも混乱が生じたほどだが、実は神奈川県内には、やまゆり園が3つあった。

いずれも県立施設で、神奈川の県花が「やまゆり」であることに由来する。知的障害の中でも特に対応が難しい「強度行動障害」の利用者が多いなど共通点もある。以下3園を簡潔に整理しておく。

【津久井やまゆり園】（1964年設立）相模原市緑区に所在。「県立民営」の施設で、民間の社会福祉法人「かながわ共同会」が、県の指定管理者として運営する。

事件後、仮移転先の横浜市港南区芹が谷の園舎が今年「芹が谷やまゆり園」として開設、県内4つめのやまゆり園が誕生した。

【愛名やまゆり園】（1966年設立）津久井と同じく、かながわ共同会が運営する「県立民営」の施設。厚木市愛名

【中井やまゆり園】（1972年設立）今回、異様な支援が明るみになった県内唯一の「県立県営」による直営の知的障害者施設。足柄上郡中井町に所在。そもそも強度行動障害とは何か。また、

あるべき支援の姿とは……。中井を報じた共同通信社（生活報道部編集委員）の市川亨記者、そして津久井と愛名、両やまゆり園を運営する「かながわ共同会」の元職員Tさんにも加わってもらい、この問題を包括的に論じていきたい。

Tさんにはすでに本誌8月号で、かながわ共同会が抱える問題点を赤裸々に語ってもらったほか、植松死刑囚が職員時代に残したヒヤリハット報告書（内部資



内部告発があった神奈川県直営の中井やまゆり園

料）から、彼の勤務態度や人間性を読み解いてもらった。記事は「Yahoo! ニュース」でも全文公開されたが（内部資料が明かす植松聖死刑囚と津久井やまゆり園の支援の実態）、「裁判で明らかにならなかった真実を知った」「植松に対する見方が変わった」など大きな反響があった。本記事と合わせてお読みいただきたい。

## 「まるで刑務所のように 異様な支援の実態とは」

渡辺 市川さんが書いた共同通信社の配信記事が大きな波紋を広げています。簡単に記事のポイントをまとめると、中井やまゆり園では、一部の入所者を1日20時間以上、外から施錠した鉄製扉のついた個室に閉じ込める対応が常態化し、特に異様なのが、居室に設置したカメラの映像を職員室のモニターで監視しているというんです。まずは、この報道に至った経緯をお話いただけますか。

市川 私が以前ネットに書いた記事を見て、職員の方が数カ月前に連絡をくれた

んです。「うちの園にはこういう問題がある」と。そして、複数の職員の方々から数カ月かけて話を聞いてきました。渡辺 お聞きになってどう思いました？

市川 まず20時間以上というのは異常だなということと、私も津久井やまゆり園の事件は関心を持って見ていましたから、いろいろ資料を調べてみました。

すると、県が3月に出した報告書（障害者支援施設における利用者目線の支援推進検討部会報告書）の中で、すでに中井やまゆり園で20時間以上の居室施錠が行われていることが書かれていたんです。私は正直、「どうしてこれが大きな問題にならないんだろう」と驚きました。渡辺 ただし、県の報告書にはカメラ監視のことは報告されていませんよね。

実は私は一昨年、津久井やまゆり園の元職員を取材した時に耳にしていました。「中井やまゆり園に比べたら、まだ津久井はマシですよ」という口調で語ってくれたのですが、「中井では刑務所のように利用者をカメラで監視している。利用者の行動障害が激しくて、うかつに居室

秋	21時間から23時間の居室施設 (タイムアウト含む)
泉	13時間から19時間の居室施設 (タイムアウト含む)
泉	15時間以上の居室施設 (タイムアウト含む)
泉	9時間から12時間の居室施設 (タイムアウト含む)
泉	22時間の居室施設 (タイムアウト含む)
泉	21時間から22時間の居室施設
泉	21時間から22時間の居室施設

今年2月時点の中井やまゆり園の個室施設の状況を記した内部資料 (左側は寮の名称)

に入ると職員の方が危険だから」というんです。それを聞いたとき、まさか動物園の猛獣じゃあるまいし、と思っていたのですが、それが本当のことだったと。市川 中井やまゆり園には7つの寮があり、「山寮」「空寮」「海寮」などの名称がついているのですが、カメラ監視を行っているのは「泉寮」というユニットです。居室は7室ありますが、1つは短所入用なので、基本的には6人が6部屋に入っています。そして、職員は職員室に並んだモニターを見ていて、利用者がドアを叩いて開けてくれという仕事をしたら開けるとか、散歩や入浴のときだけ連れ出して、戻ったら施設すると。

**渡辺** 要するに、泉寮にいる利用者の人たちは、それくらい他害行為が激しい人たちだと捉えていいんでしょうか。

**市川** ところが、情報提供してくれた職員によると、泉寮の他にも強度行動障害の寮はあるし、行動障害がけっこう激しい人がいるのですが、必ずしも泉寮のように閉じ込めているわけではないと。

**渡辺** 強度行動障害には判定基準がある

**渡辺** さて、Tさんは、津久井やまゆり園と愛名やまゆり園を運営する「かながわ共同会」の職員として15年以上のキャリアがあります。本誌8月号で語ってくれたことも補足しながら話しますが、植松死刑囚が津久井やまゆり園在職中に勤務していた「のぞみホーム」も独特の雰囲気のあるホーム(寮)でしたよね。

例えば、「利用者なんて死ねばいい」

はずですが、どういう方が泉寮に入るのか、明確な基準があるわけではない？

**市川** 例えば、職員に飛び掛かってくるとか、暴れるから仕方ないんだとか、泉寮の職員は思っているかもしれないませんが、じゃあ本当に仕方ないかどうかを検証しているわけではない。とにかく泉寮は他の寮の職員に実態を見せない。まず泉寮に入れないし、入っても居室閉じ込めだし、利用者の障害がどの程度なのか、実際に見ているのは泉寮の職員だけということです。

**渡辺** 要するに、同じ施設内でも「泉寮はおかしいんじゃないか」という雰囲気があるということですか。

**市川** そのようです。秘密主義のような感じですね。

### 施設内でも疑問視される「泉寮」の秘密主義

**渡辺** 市川さんの記事には「長時間の施設が10年以上続いている人も数人いる」とありますが、泉寮でそうした支援が常態化したのはいつ頃なんでしょう。

と公言する職員がいたり、「おい、こらてめえ」と命令口調で話す職員がいたり。Tさんは、植松が「のぞみホーム」で、ああいう考え方に取りつかれたのには理由があるとおっしゃっていました。

**T** そうですね。でも、市川さんのお話を聞いた感じだと、津久井では行動障害の最も激しい人たちが入所していた「みのりホーム」という寮が、そういう感じでした。他のホームの職員が入れないわけではないのですが、表立って入るのは控えてほしいという雰囲気があって、中であんなに何が行われているかなんて、全然わからなかったですからね。

**渡辺** 「みのりホーム」は、私が取材した平野和己さんと吉田壺成さんという利用者が入った寮なので、親御さんからいろんな話を聞いています。特に事件後(岸が谷園舎に仮移転後は「6寮」という名称に)は、「知らない人が入ると乱れる利用者が多い」という理由から、親の立ち入りも一切禁止だったそうです。

あるいは、週末に平野和己さんの両親が和己さんを外出させるために迎えに行

**市川** いつ何をきっかけにそうなったかはまだ取材できていませんが、泉寮は中井やまゆり園でも独特の存在で、他の寮はカギが共通で職員が行き来できるので、泉寮だけはカギが違っていて、他の寮の職員が容易には入れないそうです。泉寮では、行動障害が特に強度な人たちを見ているから、「俺たちは特別だ」というエリート意識があって、泉寮での勤務を経験した職員が、県の本庁に異動した後、再び課長とか部長という肩書で中井に戻って来るそうです。現在の生活支援部長も、かつて泉寮の職員だった人ですから、なおさら以前のやり方を変えようとはしなかったという話でした。

**渡辺** 親御さんは入れるんですか？

**市川** いや、親御さんも泉寮には入れないみたいです。そもそも、施設全体として普段の支援の状況や入所者の生活について、親御さんに詳しくは伝ええないという話ですから。自分の子が20時間以上施設されているという明確な認識を持って、職員の方々は言っています。

くと、衣類も含めて和己さんの全身に似っこのニオイが染みついている、ホーム長に理由を尋ねても、「さあ？」と明確な理由は聞けなかったという話です。吉田壺成さんにいたっては、2018年に原因不明の骨折をして(巻頭グラビアP10・写真②を参照)、お母さんは虐待を疑ったのですが、園からは否定されて、今でもうやむやになったままです。

**T** 僕が泉寮のお話を聞いて一番引くかかるのは、何の検証もしていないという点ですね。しかも、それが県立直営の施設であることに、すごい違和感を感じます。県は、かながわ共同会に対して虐待は良くない、施設や身体拘束は減らすべきだと、あれだけ言っていたにもかかわらず、県の直営施設で20時間以上の拘束があったというのは、本末転倒だし、じゃあこれまでいっていた県は何をやっていたのかと聞きたくりますよね。

### そもそも「強度行動障害」とは不適切な支援が障害を招く

**渡辺** そもそも「強度行動障害」とは何

かというところ、自分の顔を叩くなどの激しい自傷行為や、物を壊して大暴れるなどの他害行為やパニックが頻繁に起こる状態をいい、主に自閉症の人たちに起こりやすい現象だとされています。

ただし大切なのは、彼らは生まれつき行動障害だったのではなく、その背景には特有の音や光、触覚などの感覚過敏があつて、その不安感や不快感を周囲に伝えられないストレスが積み重なって起こると考えられていることです。これは強度行動障害の支援者養成研修のテキストの最初に必ず書かれていることです。

**市川** 私に情報提供してくださった職員の方々がおっしゃるのも、まさにそのことです。強度行動障害といっているけれども、それは不適切な環境に置かれているからひどくなるのであつて、暴れるからといって、ただ拘束したり閉じ込めたりするだけでは何も解決しないと。

**渡辺** その証拠に、津久井やまゆり園では「大暴れして手がつけれない」と判断されていた平野和己さんや吉田壹成さんが、横浜市内の別の施設に移ったとこ

員の証言で発覚したという記事です。

これも以前、Tさんが津久井やまゆり園時代に体験したことと似ていますよね。あるとき、自閉症で反復性行動のある利用者に対して、職員がヒンズースクワットを強要して面白がついてたところ、利用者が逃げようとして転倒してケガをしました。ところが、「利用者が突然動き出してケガをした」と後輩職員に口裏合わせをして、虚偽の報告書を作成したという話がありましたよね。

**T** 施設内には、もう表に出ないことが山ほどあります。例えば、利用者さんがケガをしたとしても、ひと月で治るケガはケガじゃない。どうしてかというところ、月1回家族会が開かれて、そのとき家族が来るので、それまでに治るなら報告する必要はないという感じなんです。

## 植松死刑囚が見ていた光景 津久井と愛名の内部画像

**渡辺** 植松死刑囚は、津久井やまゆり園に約3年3カ月にわたって勤務していました。その間、いったいどんな光景を目

ろ、まったく見違えるように変化してしまつたことです。私は、それをこの目で見ていたのはつきり言えますが、障害を重くするのも軽くするのも支援しづらいという事実が、強度行動障害ほど如実にわかる例はなかなかありません。和己さんも壹成さんも、今いる施設のリサイクルセンターなどで朝からフルタイムで働いていて、本当に驚いてしまいます（巻頭グラビアP13・写真⑫～⑮を参照）。

**市川** 中井の泉寮にいたのは20代、30代の利用者なのですが、ここで10年、20年と過ごす、当然部屋に閉じ込められるわけですから、徐々に筋力や体力が低下していく。そして、40～50代で車いすが必要になると、もう暴れる力がないというところで、他寮に移されて高齢になつて亡くなつていく。つまり、泉寮で弱っていくのを待っている。私はそれを聞いてすごくおぞましいなと思いました。

それと、泉寮の利用者の行動記録を見たのですが、渡辺さんがおっしゃるように、とても人を見ているような記録ではなく、まるで動物の観察記録のような書

にし、どうして利用者には生きる意味がないと考えるようになったのか。

それを知る上で貴重な映像を、愛名やまゆり園の職員の方が極秘に提供してくれました。いわゆる「隠し録り動画」ですが、実は7月に新宿のロフトプラスワンで行った篠田編集長や雨宮処凛さんらとのトークイベント「相模原障害者殺傷事件の真相に迫る」で初めて公開し、Tさんに解説してもらつたものです。

その動画のスクリーンショット画像をいくつかお見せします。まず、ここではAさんと呼びますが、車いすにY字ベルトで固定され、手に大きなミトンをはめられています。これは昨年9月の映像ですが、違法な身体拘束の典型例です（巻頭グラビアP11・写真④を参照）。

**T** Aさんは自分の手を噛むなどの自傷行為が激しい方なんです。

**渡辺** もう一枚のBさんも、手にミトンをはめられ、重たい鉄扉の居室に閉じ込められています（同P12・写真⑤～⑩）。

実は、昨年9月に毎日新聞デジタルが、Bさんの状況を写真入りで告発したので

き方なんです。気持ち悪いというか、ザラツとした不快感を覚えました。

**渡辺** どんな記録なのか、支障のない範囲で紹介していただけますか。

**市川** 例えばですね、「粗暴あり。メガネ破壊」とか「夕方はリラククスした声を上げていた」「トビラ叩きがあり、職員が聞き取りを実施」「その後、落ち着いて、おやつを受け入れる」とかですね。**T** 職員が関わると、ひどい状況になるから、ただ放置して落ち着くのを待つという感じですよ。ね。「リラククスした声を上げていた」というのも、なぜリラククスしているのか、どんな声を上げているのかも考察していないし、おおよそ支援らしいことは何もしていません。

**渡辺** 市川さんは、先ほどの記事の翌日に、続報としてこんな記事も配信しています。2年前の出来事ですが、利用者が鎖骨を折るケガをした際に、職員が「邪魔だ、どけ」と洗濯物などを運ぶカートを強くぶつけた疑いがあったにもかかわらず、園では「他の入所者が踏んだことが原因」と事故扱いで処理したことが職

ですが、それに対して、かながわ共同会報は、いや、この部屋は施設はしておらず、Bさんは自分で扉を開けられるんだと反論しました。

**T** 確かに施設はしていませんが、Bさんが鉄扉を自分で開けて出てくるのを私は一度も見ることがないです。

**渡辺** 動画には、Bさんが出たくても出られない状況がはつきり映っていますよね。こちらの写真(⑨)はBさんが外に出たくて鉄扉をペロペロとなめまわして錆びついてしまった写真です。

市川さんはこれらをご覧になってどう感じますか。

**市川** こういう映像が外部へ出てくることの意味は非常に大きいと思います。私自身は知的障害者施設の内部を見たことがありますが、一般の方はもちろん、記者だつて多くはその内情を知らないと思います。こういう施設で暮らす生活がどういうものなのかを想像することさえ難しい状況です。こういう映像を公開するのはすごく大切なことだと思います。

**渡辺** こちらの写真(P10・写真③)は、



利用者の適性に合わせ工夫された居室

先ほどの平野和己さんが津久井やまゆり園（芹が谷園舎）にいた時代の居室です。これを見て、父親の泰史さんがおっしゃっていたことが非常に印象的でした。

『煉獄のクリスマス』（プラット・カプラン著）という有名な写真集があります。1960年代のアメリカの知的障害者施設の悲惨さを世界中に伝えた衝撃作ですが、この写真集に映っている居室と、和己さんの居室がそっくりなんですよ。

T Bさんの居室に関していえば、もつとひどいですよ。写真（P12・写真⑩）の右下に見えるマットが唯一の布団らしきもので、Bさんはこの上に寝ているわけですよ。

Cさんにいたっては、専用の居室が与えられておらず、ずっとロビーのソファで寝させられていました。Cさんがソファに横になっていている写真がありますが（P12・写真⑪）、これは別にくつろいでいるのではなく、ここが彼の「居室」だったんですよ。

昨年、愛名やまゆり園が職員からの内部告発を受けて、県の視察が行われたの

が起きないようにするにはどうしたらいいかという発想がほとんどないです。  
渡辺 私も現在、TEACHプログラムを猛烈に勉強しているところですが、実は平野和己さんや吉田壺成さんを、それこそ「生まれ変わらせた」ともいえる施設の所長さんが言っていてドキリとさせられたことがあるんです。

研修などでTEACHプログラムを学び、それを誤ったかたちで中途半端に取り入れようとした結果、「なるべく利用者に与える刺激を少なくする」という名目で、閉じ込めやネグレクト的な支援が正当化されるようになったのではないかと言っています。

T 確かに、少しの刺激でも大暴れしてしまう利用者さんがいれば、なるべく刺

ですが、その際のやりとりを記録した内部文書を見たんです。視察した県の職員が「共有スペースに寝ている人もいると聞いたのですが」と、当時のかながわ共同会の草光純二理事長に尋ねたんです。そしたら、理事長が「そんな人はいません」と断言したのですが、後でCさんがそうだったとわかった。それで、どうやって実態を隠すか、職員がさんざん協議した経緯が記されています。

渡辺 すごい話ですね。理事長もまさか、自分の法人内でそんなことが行われているとは思いませんでした。

T 結局、こんな支援を続けていると、利用者がかわいそうだけでなく、職員だって心を病んでいくんですよ。こんな仕事にやりがいを感じられるはずがないし、みんな心のどこかで「おかしんじゃないか」と思っているはずですよ。

渡辺 本誌8月号でもさんざんおっしゃってましたよね。利用者のためにも職員のためにも、そして社会のためにも、支援の質を180度転換することです。

激をなくして、最終的には居室に閉じ込めてしまうのが、その人の適性に合わせた支援なんだと言っているわけですからね。完全に間違った解釈ですが。

それと、先ほどのBさんの居室の閉じ込めが大きく報道された後、Bさんの親御さんへの説明があったんです。そのやりとりを記録した内部文書も見たのですが、親御さんがまず言ったのは、施設側に対して「こちらこそ迷惑をかけてすみません」と頭を下げて、「報道の人は、うちの子が大変だって知らないからすぐ騒ぐけど、だったら1日くらいうちの子の面倒を見ればいいのに。そうしたら、大変さがわかるから」といったそうです。

親御さんとして一番怖いのは、施設から「もう身体拘束はできないから、おたくのお子さんは預かれませんか」と言われることなんですよ。だから、うちの子の面倒を見てくれるなら、多少の人権侵害には目をつぶるし、20時間以上の施設でもかまわないという心理が働くんだと思います。基本的に親御さんは、施設には強く言えないのが現状ですから。

## ここ30年で蓄積が進んだ強度行動障害の支援とは

渡辺 強度行動障害の人をどう支援すればいいかについては、ここ30年でもかなりの研究や実践の蓄積が進んでいます。

その代表例が「TEACH（ティーチ）プログラム」と呼ばれるもので、1970年代にアメリカのノースカロライナ州で開発された自閉症者の支援プログラムです。写真を見るとわかりやすいと思うのですが、私が各地の施設を取材した際に撮影したものです。

自閉症の人たちというのは、言語によるコミュニケーションは苦手ですが、イラストや写真など視覚を用いるとコミュニケーションができたり、パニックを起こさずに落ち着いて過ごせるなど、ひとりの利用者に合わせて生活しやすい環境が整えられています。この居室と、津久井やまゆり園の和己さんの居室を比べると、その違いは一目瞭然です。

T やまゆり園の支援現場では、問題が起きたらどうするかは考えますが、問題

渡辺 そこもメディアにとっては非常に報じにくい問題であると同時に、きわめて大切な現実なんですよ。

強度行動障害というのは、家族だからこそ手に負えないという側面が多分にあります。なぜかというところ、幼い頃から、親はわが子が「普通」に育ってほしいと思っただけなのに、しつけをしようと思っただけなのに、そういうのが全部、自閉症の子にはトラウマとして折り重なってしまっているんです。でも、それは親の愛情が不足しているとか、育て方が悪いなどという単純な理由からではない。親だってそんな現実を変えられるものなら、どうにかしたいと思っただけなんです。

だから、そういう現実を変えられるし、現に行動障害のある人たちが生き生き暮らしている現場が全国にたくさん存在することを、メディアはもっとしっかりと伝えなくてはいいと思います。

市川 私自身、ダウン症の子どもの親なので、親が施設に対し「お世話になっています」という気持ちになったり、「私が死んだら、誰がこの子の面倒を見てく

れるのか」と思ったりするのは分かりません。

でも、昔に比べると入所施設以外の選択肢は増えてきています。子育てや取材の中で、自閉症の強い人も知っています。奇妙に見えても「別におかしなことじゃない」と周りが受け止めたり、その人の気持ちを酌んだりすることで、親はずいぶん楽になると思います。

### 職員には「通報義務」が… 情報の隠ぺいこそ法律違反

**渡辺** 市川さんに情報提供した職員の方々は、今どんな状況にありますか。

**市川** 園内で「犯人探し」というわけではありませんが、「内部文書を表に出すのは機密漏洩だ」とか「誰がやったんだ、あいつじゃないか」とか、そんな憶測が飛び交っているようで、とても不安だし、神経質になっていますよね。

**渡辺** Tさんも同じ立場に置かれた経験者として、市川さんに情報提供をした方々に言いたいことはありますか。

T まずはよくやったと。よくぞやって

とありますけど、先ほど言ったように、

仮に事実と異なっていたことが調査の結果わかった場合でも、通報者は保護されるんです。ましてや、《懲戒処分の対象》とは、無知にもほどがあります。

T とにかく、職場ではいろんな同調圧力が働いて、まわりもすぐ「そんなことない」って言ってきたりしますが、外の世界に出てみたら、それはあっけなく崩れるんですよ、世界は思ったより広いんです。自分が常識だと思っていたことが、世間一般から見れば全然常識ではない。だから、世の中の価値観に照らし合わせるために、まずは表に出すことです。**市川** 情報提供した方々は、周囲からいろいろ言われて不安も感じているようですが、みなさん、自分のやったことは正しいと自信を持っていると思います。

**渡辺** 声を上げないと何も変わらないというの、これまで日本の福祉を貫いてきた厳然たる歴史でもあります。誰かが、批判覚悟で必死に声を上げることで、初めて何かが変わる。だから周囲の批判には絶対負けないでほしいですね。

くれたと真っ先に言いたいですね。あなた方がしたことは、法律的にも道徳的にも正しいことだと伝えたいですね。

**渡辺** 私が施設職員と話していて痛感するのは、「障害者虐待防止法」の条文がまったく知られていないことです。この法律では、施設職員には通報が義務づけられているんです。条文はこうです。

《虐待を受けたと思われる障害者を発見した者は、速やかに、これを市町村に通報しなければならぬ》(第16条1項)

つまり、「この利用者は虐待されているんじゃないか」と疑いを持った時点で、施設職員には通報する「義務」がある。通報しないことこそ、むしろ法律違反だということですね(罰則規定はない)。

さらに、通報者は虐待の証拠をつかむ必要もなければ、たとえ間違いだとしてもわかった場合も、《通報をしたことを理由として、解雇その他不利益な取扱いを受けない》(同条4項)と定められています。虐待を証明する義務は、通報者ではなく、通報を受けた自治体にあるんで

### ●おわりに

神奈川県は、9月27日、中井やまゆり園の「支援改革プロジェクトチーム」を発足させたと記者発表を行った。

メンバーには昨年来、県の「利用者目線の支援推進検討部会」の委員を務め、障害者の権利擁護に関する第一人者である弁護士佐藤彰一氏(國學院大教授)や、強度行動障害の支援に実績のある社会福祉法人同愛会の大川貴志氏、汐見台病院医師の野崎秀次氏など、きわめて信頼のおける委員の顔ぶれがそろったことを、まずは評価したい。また、10月5日には黒岩知事が中井やまゆり園を視察、あらためて改革プロジェクトの推進に全力を挙げるとの意思を表明した。

かたや、津久井と愛名の両やまゆり園を運営する「かながわ共同会」は、いまだ事件の本質に向き合おうとしていない。というのも、今年7月20日、事件から5年目の追悼式(県・市・共同会主催)の記者会見において、新たに理事長に就任した山下康氏はこう発言したのだ。

「法人としては、植松死刑囚が職場とい

す。これをぜひ知ってほしいですね。

T でも、市川さんに情報提供した方々は、私と違って複数人いるわけでしょう。仲間がいるのは、すごいアドバンテージですよ。私は一人だったから悶々と悩みましたし、新聞社やテレビ局に話を持ちかけても、一人の証言だけでは記事にできないといわれて、なかなか報道してもらえませんでした。だから、なおさらつらかったです。一人だと確かに「世迷い言」と疑われても仕方ないかもしれませんが、2人以上いれば、これはもう事実なんだと胸を張れますからね。

**渡辺** かながわ共同会では、内部告発者を「懲戒処分」にするという文書を、当時の草光理事長名で出して問題になった経緯もあります。内容はこうです。

《職員が事実とは異なる情報を外部に通報し許可なく園内の写真を提供したのであれば懲戒処分の対象にもなりうる》

でも、これが発覚した時点で、黒岩祐治知事や県から嚴重注意を受けて、草光理事長はあつげなく謝罪しました。文書の中には一応、《事実とは異なる情報》

うか、仕事の中でこういう思想をつくり上げてきたという考え方には立っていません。彼本来のパーソナリティ障害からくるものだと、私は理解しております。この言葉は、その直前に黒岩知事が記者会見で語った「虐待といわれても仕方がない支援もあったのは間違いない(略)。利用者の安全のために、車いすに縛りつけておく、部屋に閉じ込めておく。これは変えなければいけない」という言葉が無視した発言とも取れる。

さらには、昨年3月の横浜地方裁判所での判決文に明記された次の一文――《被告人の重度障害者に関する考えは、被告人自身の本件施設での勤務経験を基礎とし、関心を持った世界情勢に関する話題を踏まえて生じたもの》を完全否定した発言とも取れる。

かながわ共同会は、この頑なな姿勢をいつまで続けるつもりなのか。今後も津久井やまゆり園を含めた施設のあり方をしっかりと注視していく必要がある。

(本文構成・渡辺一史)